

コンゴ民主共和国話題集

【国名】

- 13～17世紀に栄えたバンツー系コンゴ族のコンゴ王国に由来。「コンゴ」はバンツー語で「山」を意味。
- ベルギー王の私有地時代は、国王が自由にできる国（「コンゴ自由国」）と呼ばれていたが、1908年にベルギー政府の植民地となり、その後、1960年に「コンゴ共和国」として独立。国名は1964年に「コンゴ民主共和国」となり、1971年に「ザイール」、そして1997年に再び「コンゴ民主共和国」と変遷。
- 旧仏領のコンゴ共和国はコンゴ川を挟んだ隣国。混同を避けるため、コンゴ民主共和国は首都名から「コンゴ・キンシャサ」とも呼ばれる。

【国旗】

- 国名変更の度に国旗も変更。現在の国旗は、1971年まで使用さ



国旗

れた国旗が 2006 年に復活したもの。

- 平和を象徴する水色を背景に、赤は国家のために殉じた者の血、黄色は国富、星は国家の輝かしい未来を象徴。

【天然資源】

- 「地質学上の奇跡」と言われるほどの豊富な鉱物資源に恵まれており、銅、コバルト、ダイヤモンド、金、鉄鉱石、ニオブ、タンタル、スズ、タングステン、コルタン、亜鉛等を産出。特に、携帯電話、ノートパソコン等を使用されるリチウムイオン二次電池に使われるコバルトは、埋蔵量・生産量ともに世界第 1 位。
- かつてはウランの採掘も行われ、広島に投下された原子爆弾の原料は当時のベルギー領コンゴ国産。



- ギニア湾沖に海底油田を擁しており、国際石油開発帝石（INPEX）（株）は、1970 年より子会社の帝石コンゴ（株）を通じて、原油の開発・生産事業に参画。計 10 油田で日量約 1.1 万バレルの原油生産。2017 年、右権益期限を 2043 年まで延長することを決定。
- 外務省東口玄関横の「陸奥宗光像」には、コンゴ民主共和国東部地方産の花崗岩を使用。
- 1970 年代、急増する銅需要を満たし、銅資源を安定的に確保するため、日本鉱業株式会社を中心に多くの企業がコンゴ民主共和国南部に進出。数百名の日本人が居住し、日本人学校等を備えた日本人町が形成されたが、こうした企業は、1980 年代、銅単価の下落を受けて撤退。

【豊かな自然】



コンゴ川

- アフリカ第2位の面積を有する国土は豊かな自然に覆われている。
- コンゴ川は、流域面積はアマゾン川に次いで世界第2位（約369万km²）、幅は10kmを超える所もあり、長さは世界第5位（約4,370km）。5か国（コンゴ民主共和国、コンゴ（共）、中央アフリカ、アンゴラ、ザンビア）を流れる国際河川。
- ユネスコの世界遺産に5件の国立公園や自然保護区が登録されており、中西部のサロンガ国立公園には、固有種ボノボが生息。
ボノボは、チンパンジーと同じパン属に分類される類人猿で、チンパンジーから進化。ピグミーチンパンジーとも呼ばれる。コンゴ川流域に生息し、現在、個体数は1万頭を切ったと見られている。
京都大学の研究チームは、1970年代からコンゴ民主共和国でボノボ研究のフィールドワークを実施。



- コンゴの広大な熱帯雨林が広がる「イトウリの森」には狩猟・採集で生計を立てる「エフェ・ピグミー」が暮らしている。男性平均身長でも 150 cm 以下で、森の素材でつくる高さ 1.2m~1.5m の小さな家に住んでいる。

【音楽（リンガラ・ミュージック）】

- 首都キンシャサ発祥のアフリカ大陸で最もメジャーな大衆音楽。
- リンガラ語（コンゴ民主共和国の公用語）で歌われることから一般的に「リンガラポップス」、「リンガラ・ミュージック」と呼ばれる（「ザイーリアン・ルンバ」「アフリカン・ルンバ」等とも呼ばれる）。
- 1930年代の奴隷貿易の犠牲者達がキューバから持ち帰ったキューバン・ルンバとコンゴの伝統音楽が融合してできあがったと言われている。

- リンガラ音楽の大御所であるコンゴ民主共和国出身のミュージシャン「パパ・ウェンバ」が2016年4月に死去した際は、日本でもリンガラ音楽アーティストによる追悼のライブを実施。
- 2021年12月14日、「コンゴのルンバ」がユネスコ無形文化遺産に登録された。

【開発協力】

- 1973年、我が国は、コンゴ川下流のマタディからバナナ港までの鉄道及び鉄道・道路併用橋（マタディ橋）の建設計画に対して、当時域内最高額の345億円の円借款を供与。ザイール（当時）政府の経済事情により全計画を実施することはできなかったが、マタディ橋は1983年完成。



- 1984 年 3 月、ザイール（当時）を公式訪問された皇太子同妃両殿下（当時。現：上皇上皇后両陛下）は、マタディ橋を視察。
- 無償資金協力により補修・拡張された、首都キンシャサのンジリ国際空港と街の中心部を結ぶ「ポワ・ルー（大型トラック）通り」（「コンゴ・日本大通り」）は、日本の質の高いインフラ整備と高く評価されている。2015 年 2 月 21 日の竣工式には、カビラ大統領（当時）が出席。
- 国立職業訓練機構（INPP）は、1964 年設立の同国最大の公的職業機関。当時は「INPP が提供する訓練は役に立たない」と産業界から厳しい評価を受けてきたが、日本の支援により、指導員の再教育、訓練機材の整備及び訓練施設の改修により信頼を取り戻し、INPP で多くの若者が学んでいる。

- 現地で走る自動車の大半は日本車で、とりわけ国内シェアの約 55%はトヨタ車。豊田通商の子会社である CFAO が代理店として進出している。
- 柔道や空手等の日本武道は、サッカーに次いで人気のあるスポーツ。閣僚等ハイレベルの中でも柔道経験者は多い。在コンゴ民主共和国大使館でも 2016 年以来、柔道大使杯及び空手大使杯を毎年開催。



【日本人フルート奏者：藤井香織氏】

- 多くの国際賞を受賞している日本人フルート奏者の藤井香織氏（NY 在住）は、コンゴ民主共和国にて積極的な社会活動を展開。2014 年に NPO 法人「ミュージックビヨンド」を設立。音楽家が指導者を持たずに独学で練習するアフリカの現状を前に、現地に赴き音楽指導の活動を開始。

2022 年末まで 13 回にわたりコンゴ民主共和国を訪れ、「音楽を愛する宗教家集団」として知られるキンバンギスト・オーケストラに対して指導を行い、「女性が輝く社会」の実現に貢献するため、女性室内楽アンサンブルも結成。同オーケストラとのコラボレーションにより開催したコンサートは好評を博している。

【日・コンゴ民主共和国文化センター】

- ゴンベ地区高等教育学院内にあるコンゴ民主共和国で現在運営されている唯一の日本語教育機関。平成 23 年度草の根文化無償事業によって建設されて以来これまでに 300 名を超えるコンゴ人の生徒が日本語を学んできた。
- 同センターは、長谷部葉子慶應義塾大学准教授の活動をきっかけに設立され、2016 年には慶應義塾大学環境情報学部とゴンベ地

区高等教育学院の間に交流協定を締結。留学生の受入れ等の人的交流も活発。

- 同センターには、日本語教室のほかに大きな道場が併設され、柔道や空手の教室を毎日開催。他にも、同道場を活用した文化イベント、スピーチコンテスト、映画上映会などが開催され、若者に日本を紹介する場となっている。

【キンシャサの奇跡】

- 首都キンシャサは、1974年に開催されたボクシング・ヘビー級タイトル戦（いわゆる「キンシャサの奇跡」）の舞台となった。

18歳でローマ五輪のボクシング金メダルを獲得し、22歳でヘビー級世界王者となったモハメ



アリ vs フォアマン

ド・アリ（米国出身。旧名カシアス・クレイ）。

アリは、ベトナム戦争従軍を拒否してボクシング界を追放された後、3年のブランクを経て32歳で、若き王者ジョージ・フォアマンを相手に王座奪還に挑戦。

世紀の一戦となったヘビー級タイトルマッチは、1974年10月、首都キンシャサの「5月20日スタジアム(Stade du 20 Mai)」で行われ、アリが劇的なノックアウトで勝利を収めた。

【キンシャサが舞台の映画】

- 西アフリカ系フランス人のアラン・ゴミス監督によるキンシャサを舞台とした映画「わたしは、幸福（原題：Félicité）」は、第67回ベルリン国際映画祭で上映され、審査員グランプリを受賞。また、2017年アフリカ映画アカデミー賞では作品賞を

含む 6 部門を受賞。日本でも 2017 年 12 月に全国で上映された。

【女性にとって最悪の場所で闘う医師】

- 2018 年 12 月 10 日、産婦人科医デニ・ムクウェゲ氏がノーベル平和賞を受賞した。ムクウェゲ医師は、1999 年、コンゴ民主共和国東部にパンジ病院を設立して以降、5 万人以上の、性暴力の被害を受けた女性たちの治療と精神的ケアをしている。また、「今こそ、国際社会が、紛争下の性暴力の根絶に向け、行動を起こすべきだ。今こそ、平和を」と訴え続けている。

2016 年、ムクウェゲ医師の活動を描いたドキュメンタリー『女性を修理する男』（ベルギー制作）が全国各地で上映され、2022 年には日本制作のドキュメンタリー映画『ムクウェゲ「女性にとって最悪の場所」で闘う医師』が上映された。（了）